

キャリア教育型の入学前教育「桐蔭プレアド」への参加が 入学前後の学生の学びと成長に与える影響

溝口 侑¹

The Impact of Participation in “Toin Pre-Admission,” a Career Education-Focused Pre-Admission Education Program, on the Learning and Growth of Students Before and After Enrollment

Yu MIZOGUCHI

桐蔭横浜大学では、2019年より改革に着手し、大学全体の教育目標「ユニバーシティ・ポリシー(UP)」を策定し、UPに掲げる資質・能力の育成を目指す大学共通プログラムMASTを構築した。本稿では、大学共通プログラムMASTの初年次必修科目である「桐蔭キャリアゲート」と入学前キャリア教育プログラム「桐蔭プレアド」の関係性を整理したうえで、入学前教育での学生の成長について報告する。

「桐蔭キャリアゲート」は学生一人ひとりが将来の「なりたい自分」を描き、そのために大学4年間で学ぶことや挑戦することを明確にし、学習意欲を向上させることを意図した科目である。こうしたキャリア意識の醸成や学習意欲の向上は入学する前の段階から取り組むべき課題であると考えて、桐蔭横浜大学では2021年度より「桐蔭キャリアゲート」と互換する入学前の教育プログラムとして「桐蔭プレアド」を創設した。

「桐蔭プレアド」は年内の合格者のうち、希望者を対象とする全学共通の入学前教育プログラムである。「桐蔭キャリアゲート」の目的に加え、3学部すべての参加者が学部を超えて交流することを促し、入学前から共に学ぶ仲間を見つけることも重要な狙いである。全7回で構成されるプログラムは一部をハイフレックス型で実施するとともに、オンデマンド動画を視聴して事前学習を行う反転学習を取り入れたハイブリッド型で設計をしている。

参加前後で将来の見通しの得点が有意に上昇し、講座終了後には大半の参加者が本学で学ぶ意欲を示した。一方で、学ぶ準備ができていないと答えた参加者は半数程度に留まり、そうした不安を解消するためのサポート体制も整えることが課題であると明らかになった。

参加者の拡大、入学前教育を含めた初年次教育に関わる専門性の整理と人材の確保、学部との連携強化など、諸課題を一つひとつ解決していくことで、本学に入学する学生にとって意味のあるプログラムとしていきたい。

〔キーワード：入学前教育，初年次教育，キャリア教育，チーム・ティーチング，動機づけ〕

¹ 桐蔭横浜大学教育研究開発機構 y.mizoguchi@toin.ac.jp

1. はじめに

桐蔭横浜大学は分野の異なる3学部(法学部, 医用工学部, スポーツ健康政策学部)¹から構成され, これまでは専門分野の人材育成に注力してきた。しかし, 激しく変化する社会のなかで, 大学教育では, 汎用的なスキル(コンピテンシー)と専門的知識の両方を育成する教育が求められている(中央教育審議会, 2018)。そこで, 桐蔭横浜大学ではこれまで培ってきた専門性の高い教育研究を基盤に, 現代社会の変化に対応し, 未来社会の構築に貢献できる人材を育成するために, 2019年より改革に着手し, 大学全体の教育目標「ユニバーシティ・ポリシー(UP)」を策定した。UPは, 桐蔭横浜大学で学ぶすべての学生に獲得してほしい資質・能力を規定するものであり, 改革の起点となるものである。そして, このUPに掲げる資質・能力の育成を目指す大学共通プログラムMASTを構築し, 全学的に一般教育課程を刷新した。

その導入科目として位置づけられるのが, 初年次必修のキャリア教育科目「桐蔭キャリアゲート」である。大学での学びの第一歩として, 仲間とともに, 将来のキャリアを思い描くことで, 大学での学びに対する意欲を促進することを目的としている。本稿では, 桐蔭横浜大学における初年次教育の1科目である「桐蔭キャリアゲート」とそれと互換する形で設計された入学前キャリア教育プログラム「桐蔭プレアド」の関係性を整理したうえで, 入学前教育での学生の成長について報告する。

2. 桐蔭横浜大学の初年次教育と入学前教育

(1) 大学共通プログラムMASTの概要と運営体制

大学共通プログラムMASTは, キャリア教育科目「桐蔭キャリアゲート」, アカデミックスキル教育科目「桐蔭スキルゲート」, 数理・データサイエンス・AI教育科目「データコミュニケーション入門」の3つの必修科目², 現代社会を読み解くための視点を養うことを目的とした5つの体系性を持った科目群, そして将来の進路・キャリアを切り拓くために必要となる知識や資質・能力を身につけることを目標とする3つの科目群から構成される。そのなかで, 3つの必修科目と5つの体系性を持った科目群の入門科目が大学共通の初年次教育科目となる。初年次教育科目の構成を図1に示す。

入学前教育を含む大学共通科目は, 図2に示す体制で運営されている。全学の運営委員

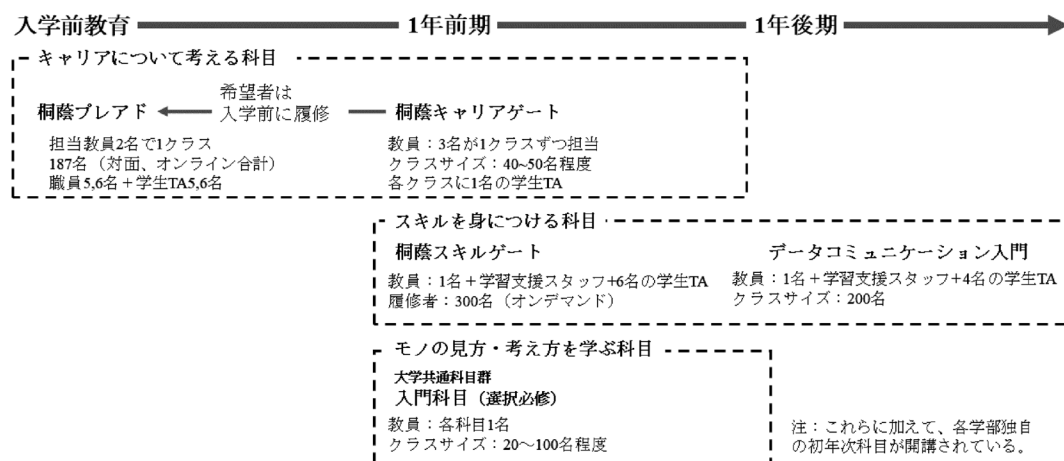


図1 初年次教育科目の構成

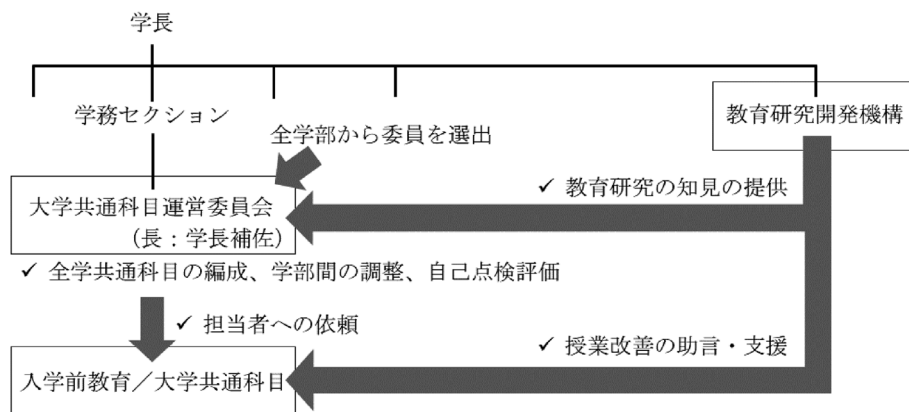


図2 大学共通の大学共通科目に関わる担当セクション

会では、カリキュラム編成や時間割の調整をし、担当者への依頼を行う。また、年度ごとに自己点検評価を行い、改善につなげている。初年次教育を組織的に展開している大学では、それ自体がFDであると考えて(山田, 2008)、専門分野にかかわらず誰もが初年次教育科目を同じ形で担当できるように多くの教員が関わっている場合もある。しかし、本学の初年次教育では、各教員が専門性を発揮することを前提に、各科目に求められる専門性に応じてチームを構成して授業を運営している。例えば、「桐蔭キャリアゲート」はキャリア教育を専門にする教員とアクティブラーニング等の教育手法に精通する教員がチームとなって授業を行っている。

(2) 桐蔭キャリアゲートから桐蔭プレアドへ

初年次必修の桐蔭キャリアゲートは、これまでの経験をふりかえって自分の強みを再発見し、未来の自分へつなげていくとともに、社会で働く身近な大人や先輩の経験を聞くことを通して社会を知るという二つのアプローチで、学生一人ひとりが将来の「なりたい自分」を描くことをサポートしていく科目である。そして「なりたい自分」になるために、大学4年間で学ぶことや挑戦することを明確にし、学習意欲を向上させることを意図している。

しかし、こうしたキャリア意識の醸成や学習意欲の向上は入学する前の段階から取り組むべき課題である。全国的に入学前教育の実施の目的としては、「学習習慣の維持」が最も多く「高校の復習」、「大学の学習」と続くことが報告されている(文部科学省, 2017)。一方で、補習教育には入学予定者の学びへの動機づけが必要となる(井下, 2013)と言われているが、学習意欲を持つには、自分なりの将来の見通しを持つことが重要である(保田・溝上, 2014)。つまり、入学前に大学卒業後の人生と職業について自分なりの見通しを持つことが大学で学ぶ目的を明確にし、学習意欲を喚起することにつながると考えられる。こうした背景から、桐蔭横浜大学では2021年度より「桐蔭キャリアゲート」と互換する入学前の教育プログラムとして「桐蔭プレアド」を創設した。

高校教育の補習(リメディアル)教育のためや学習習慣の維持のための入学前教育では、進路決定後の大学入学までの期間に、学習を継続させるために高校教育の補習や、専門教育の基礎となる知識についての学習課題を課すことになる。図3に示す実線は年内入試で進路が決定した生徒の学習行動を表している。このようなタイプの入学前教育の狙いとしては、点線で示すように、大学入学まで学習行動を継続させることにある。

「桐蔭プレアド」は、本学への接続教育と位置づけて早い段階から本学の教育に参加し

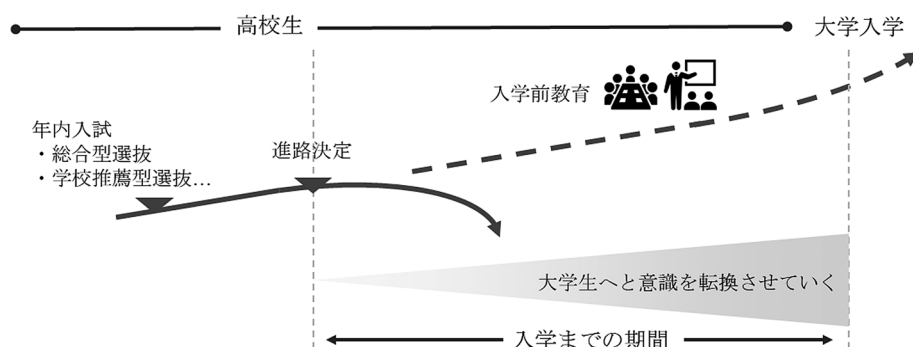


図3 進学決定から大学入学までの期間における学習行動と意識変容のイメージ

てもらい、4月を迎えて大学生になるのではなく、入学前教育を通して徐々に高校生から大学生へと意識を転換していくことを意図している。入学までの期間に、大学での学びへと動機づけ、卒業後の将来を見通し、大学で学ぶ意味を再度問い直してほしいと考えている。

しかし、全7回で1セットのプログラムであるため、共通テスト利用選抜や一般選抜での受験生の合格発表の時期にはすでに数回が終了しており参加を案内することが難しい。そのため、年内に合格手続きを取った入学予定者のみに参加者対象者を限定している。さらに任意参加とすることで自発的に参加する意欲のある生徒を主体的に学ぶ学生へと育てることを目指している。限定された参加者を対象とするプログラムではあるが、入学後にアクティブラーニング型授業などの学びの場でリーダーシップを発揮できる学生を育成することで、1年生の4月から学生中心の授業を展開することができ、参加しなかった学生も含めたすべての学生に良い効果をもたらしていると考えている。

3. 入学前教育プログラムの概要と教育効果の検証

(1) プログラムの概要

「桐蔭プレアド」は総合型選抜及び学校推薦型選抜での合格者のうち、希望者を対象とする全学共通の入学前教育プログラムである。初年次の必修科目であるキャリア教育の授業の先取りプログラムであり、修了すれば入学後に単位が認定される。2022年度は497名が対象であったが、そのうちの約4割となる187名から申し込みがあった。プログラムの目的は、これまでの学びや経験をふりかえり、自分と身の回りの社会について理解することを通して、ライフキャリアについて考えることである。入学前に大学卒業後の将来の人生と職業について自分なりの見通しを持つことによって、大学で学ぶ目的を明確にし、入学後の学習を動機づけること目指している。また、3学部すべての参加者が学部を超えて交流することを促し、入学前から共に学ぶ仲間を見つけることも重要な狙いである。

プログラムは全7回で構成される(全7回のプログラムの概要を表1に示す)。地方からの参加者や新型コロナウイルスの感染拡大状況を考慮して、5回まではハイフレックス型で実施し、3月末に実施した第6,7回は全員が対面で受講した。講座後はふりかえりを提出し、オンデマンド動画を視聴して次の講座に向けた事前学習を行う反転学習を取り入れたハイブリッド型で設計をしている。各講座後には、解説を加えて再編集したアーカイブ動画も配信し、復習に活用するように指示するとともに、欠席者へのサポートも行っている。

表1 「桐蔭プレアド」のプログラム概要

授業回	日程	主な活動内容	課題
第1回	1月22日	ガイダンス, 大学紹介, 自己理解のワーク	成功体験・失敗体験をふりかえる
第2回	2月5日	過去の自分を考える	これまでの経験と出会いをふりかえる
第3回	2月19日	過去から現在の自分をつなぐ	OB・OGのインタビュー動画を見る
第4回	2月25日	桐蔭の“学ぶ”について考える	10年後のなりたい姿と大学での学びのストーリーを描く
第5回	3月14日	もう一度, 自分に向き合う	第1～5回までの学びをレポートにまとめる
第6回	3月29日	発表準備	発表練習をしていく
第7回	3月30日	ポスター発表と大学施設ツアー	

プログラムは図2で示した体制で運営をしているが、「桐蔭プレアド」ではさらに若手職員と連携して運営することで、入学後に手続きなどの学生生活の様々な場面で頼ることになる職員を知ることも狙っている。加えて、先輩のサポーターが対面・オンラインの両方に配置され、グループワークをファシリテートする役割を担っている。先輩サポーターは昨年度の受講生の中から立候補した学生に研修を行い、学習サポーターとして採用している。今後も学生サポーターを継承していく仕組みを整えるべく、準正課プログラムの1つの活動として位置づけて整備を進めている。また、講座時間外には、教職員が受講生へメールや電話で連絡をするとともに、Slackを通じて教職員及び先輩のサポーターに相談ができるように体制を整えている。

(2) 教育効果の検証

「桐蔭プレアド」の教育効果の検証のために、プレ・ポストの調査を実施した。プレ調査は第1回のオリエンテーションの時間に実施し、対面参加者は紙で回答、オンライン参加者はGoogleフォームで回答を求めた。有効回答 $N=186$ (欠席者1名が未回答)。ポスト調査は、第7回のまとめの時間に実施し、全参加者に紙で回答を求めた。有効回答 $N=177$ (最終回参加人数)。教学IRの調査の一環である旨を説明し、「桐蔭プレアド」及び入学後の授業の成績等へは影響がないことや匿名化して処理することを説明したうえで、記名式で回答してもらった。

調査項目は、1) 将来の見通しに関する質問をプレ・ポストの両時点で尋ねた。項目はキャリアレディネス尺度短縮版(坂柳, 2019)から計画性に関わる3項目(質問項目は表2を参照)を採用し、4件法(「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」)で尋ねた。2) 大学での学びへの意欲と構えについて、それぞれ1項目ずつを独自に作成し、10点満点で尋ねた。ポストのみで調査を行った。意欲については「あなたは、現在、桐蔭横浜大学で学びたい気持ちがどのくらいありますか」と尋ね、「10：非常に強く学びたいと思っている」～「0：まったく学びたいとは思わない」；構えについては「あなたは、現在、桐蔭横浜大学で学ぶ準備がどのくらいできていると思いますか」と尋ね、「10：すべての準備が整っている」～「0：まったくできていない」で回答を求めた。

調査の結果、第1に、プログラムの前後での将来の見通しはすべての項目で得点の有意な上昇が見られた(表2)。プログラムが少なからず将来の自分について考えることに貢献したと言える。見通しの内容や行動の質的な変化については今後さらに検討したい。また思い描いた将来のなりたい自分を達成できるように、キャリア情報センターと情報を共有し、入学後の早い段階からサポートを受けられるような体制の構築が必要と考えている。

第2に、大学での学びへの意欲については平均して高い結果となり($Mean=8.38, SD=$

表2 「桐蔭プレアド」前後での将来の見通しの変化 (N=174)

項目	プレ Mean (SD)	ポスト Mean (SD)	t値
1.希望する生き方をするために具体的な計画を立てている	2.91 (0.66)	3.03 (0.66)	2.49 *
2.将来どのような人になりたいのか、自分なりの目標を持っている	3.33 (0.67)	3.55 (0.60)	4.67 ***
3.充実した人生を送るために、計画的に取り組んでいることがある	2.89 (0.72)	3.04 (0.71)	2.49 *

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ であることを表す。

1.47)、大半の参加者が本学に入学して学ぶことに強い意欲を持っていることが明らかにされた。大学での学びへ動機づけるという点では、十分な効果を上げていると考えられる。一方で、大学での学びへの構えについては、ほぼ中点であった ($Mean=5.54$, $SD=1.87$)。これは入学までに準備することの捉え方が人によって異なっていたという可能性も考えられるが、入学前教育になかで、そうした不安を十分に解消することができなかった点は、次年度以降の課題である。

4. 今後の課題

「桐蔭プレアド」の教育の質保証や運営に関わる課題としては次の3点が挙げられる。第1に、参加者の拡大に関わる課題である。入学前教育は、「(前略)入学後の学修のための準備をあらかじめ講ずるよう努める。特に12月以前に入学手続きをとった者に対しては、積極的に当該措置を講ずることとする。」(文部科学省, 2021)と『入学者選抜実施要項』にあるように、対象者は年内に入学手続きをとった者が想定されている。本学でもこれに則り、総合型選抜及び学校推薦型選抜の合格者に案内を行っている。ただし、参加は義務ではないため、2022年度の参加者は対象者の4割にとどまった。自発的に参加する意欲のある生徒を入学前から教育し、主体的に学ぶ学生へと育てるという戦略ではあるものの、今後は参加申し込みをしない層への案内を工夫する必要がある。さらに、本学では入学前教育を接続教育と位置づけており、これは本学に入学するすべての入学予定者に受講してほしい教育内容である。時間的な制約のあるなかで、共通テスト利用選抜や一般選抜での合格者に対して、どのように教育機会を創出するかが課題となる。

2つめは、運営に関わる課題である。次年度からすべての学部で必修となることから、履修人数が増加することになる。より効果的で質の高い科目へと発展させていくために、「桐蔭プレアド」「桐蔭キャリアゲート」など初年次教育科目の授業運営を行ううえで求められる専門性の整理と人材の確保が課題となる。

最後に、学部との連携の強化の課題である。「桐蔭プレアド」のすべての講座は学内に公開されている。特に第6,7回はすべての参加者が、大学に集まり、自らが計画する大学での学びについて宣言するプレゼンを準備し、発表する場である。どのような目標を持つ学生が入学してくるのかを学部教員が知り、入学後の指導やサポートに活用するための事前情報を得る重要な機会であると考えている。加えて、共通教育で学生が何をどのように学んでいるかを学部教員が知る機会でもある。通常学期では、共通科目・専門科目が同時並行で時間割が組まれているため、教員が授業を見学することは難しい。共通教育と専門教育の連携を強化するために、入学前教育という機会をどのように活用できるかが今後の課題である。

2022年度に本格始動したばかりのプログラムであり、現在も開発を進めている段階である。本学に入学する一人でも多くの学生にとって、意味のあるプログラムへと発展させていきたい。

注

- ¹ 2023年度より改組し、法学部、医用工学部、スポーツ科学部、現代教養学環(学部等連係課程)の3学部1学環の体制となる。
- ² 2022年度は、法学部、医用工学部のみが必修であり、スポーツ健康政策学部では選択科目であった。

参考文献

- 中央教育審議会(2018)『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf(参照日2022年12月16日)
- 井下千以子(2013)「8章入学前教育の動向と課題—ギャップタームをどう活かすのか—」初年次教育学会(編)『初年次教育の現状と未来』世界思想社, pp. 111-129.
- 文部科学省(2017)『大学入学者選抜にかかる最近の動向について』https://www.shigaku.or.jp/news/topics_pdf/021_docu_02.pdf(参照日2022年12月16日)
- 文部科学省(2021)『令和4年度大学入学者選抜実施要項について(通知)』https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf(参照日2022年12月16日)
- 坂柳恒夫(2019)「高校生・大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリアレディネス尺度短縮版(CRS-S)の信頼性と妥当性の検討—」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』, **68**, 133-146.
- 保田江美・溝上慎一(2014)「第7章初期キャリア以降の探究—『大学時代のキャリア見通し』と『企業におけるキャリアとパフォーマンス』を中心に—」 中原淳・溝上慎一(編)『活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション』東京大学出版会, pp. 139-173.
- 山田礼子(2008)「初年次教育の組織的展開」『初年次教育学会誌』, **1**(1), 65-72.